

活動実施報告書

国際感覚をはぐくむあそび



2025年度

1. テーマ：英語あそび

外国人講師、幼稚園職員と一緒に、歌やゲームを通じて楽しく英語や異文化に触れ合うクラスを実施した。この活動は、単なる英語の学習ではなく、子どもたちが広い世界を知り、異なる文化に触れ、自分の視野を広げるきっかけを提供する内容で実施した。

〈テーマ設定の理由〉

本園では日常的に外国人講師と関わる機会があり、子どもたちは英語に触れている。

その中で、「どうしたら伝わるのか」「日本語と英語は何が違うのか」といった気づきが見られた。そこで、言葉だけでなく表情や動きも含めたコミュニケーションに着目し、体験的に学ぶことを目的とした。

2. 活動スケジュール

年長組・年中組・年少組

一年間を通じて（4月～翌年3月）

3. 探求活動の実践：園だよりやドキュメンテーション、公開保育で保護者と活動の様子を共有した。

〈活動内容〉

子ども同士や保育者、英語のネイティブスピーカーとのやりとりを通してコミュニケーションを行った。

活動では、挨拶や天気、感情表現など身近な言葉を取り入れ、歌やゲーム、絵本の読み聞かせを通して英語に親しんだ。

また、言葉だけでなく、ジェスチャーや表情を使いながら「伝える」という経験を重ねた。

子どもたちは、伝わった時の喜びや、伝わらない時に工夫しようとする姿が見られ、「もう一回言ってみる」「動きをつけてみる」など、自ら試す様子があった。

さらに、ハロウィンやクリスマスなどの行事を通して、異文化に触れる機会を設け、興味や関心を広げた。

- 活動の一環として、子ども一人ひとりが英語で自分の名前を記入したネームカードを作成した。カードは活動中に着用し、外国人講師や友達同士で英語の名前を呼び合うことで、日常的に英語に触れる機会を設けた。制作では、好きな色やイラストで装飾することで、主体的に取り組む姿が見られた。
- また、保育室には英語の単語ポスターや絵本、アルファベットカードを設置し、遊びの中で自然に英語に触れられる環境を整えた。子どもたちは興味を持った言葉を指差したり、真似して発音したりする様子が見られた。
- 年長児の活動では、国旗カードや絵本・図鑑を活用し、さまざまな国や文化への関心を広げた。お気に入りの国旗を選び制作する中で、「この国はどこ？」「どんな言葉を話すの？」といった問いが生まれ、言語や文化の違いに気づく姿が見られた。
- 国旗への興味をきっかけに、他国との違いに目を向ける姿が見られた。地図や資料を用いて国の大きさを比較する中で、「アメリカはこんなに大きいんだ」と驚く様子があり、世界の広がりを実感する姿につながった。
- 英語を身近なものとして捉え、積極的に発話しようとする姿が見られた
- 言葉だけでなく、表情や動きを使って伝えようとする姿が育った
- 「伝わる・伝わらない」を経験しながら、工夫する力が見られた
- 異文化への興味や関心が高まった

活動実施報告書



国際感覚をはぐくむあそび

2025年度

4. 振り返り<ふりかえりによって得た先生の気づき>

英語あそびの活動を継続する中で、子どもたちが外国人講師との関わりに慣れ、臆することなく自ら関わろうとする姿が見られるようになった。初めての場面では様子をうかがう姿もあったが、活動を重ねる中で、自分から言葉やジェスチャーを使って伝えようとする変化が見られた。特に、相手に思いを伝えようとする意識が高まり、「どう言えば伝わるか」を考えながら英語を使う姿が見られた。また、言葉だけでなく表情や動きを組み合わせるなど、コミュニケーションの工夫が広がった。

サンタクロースとの関わりの中では、「サンキュー」と自分から伝えたり、「英語で話したい」という気持ちから一生懸命話しかけようとする姿が見られ、伝えたいという意欲の高まりが感じられた。

活動の中では、子ども同士で英語を使って関わろうとする姿や、「間違ってもやってみる」という前向きな態度が定着してきており、安心して挑戦できる雰囲気や育まれている。また、日本語でも英語でも「言葉にして伝えることの大切さ」に気づく様子も見られた。

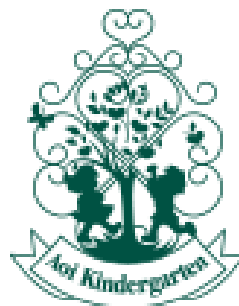
さらに、行事や活動を通して異文化に触れる経験を重ねる中で、英語を特別なものではなく「使うもの」として捉える様子が見られた。国旗や文化への関心も広がり、世界への興味につながっている。

本活動を通して、子どもたちが英語に対して自信を持ち、相手に伝えようとする力や、多様な文化を受け入れる姿勢の基礎が育まれていると考えられる。今後も日常の中で継続的に取り組み、経験の積み重ねを大切にしていきたい。



活動実施報告書

表現あそび



2025年度

1. テーマ：表現あそび

本園では、音や動きを感じた際に生まれる子どもの問いを出発点に、ピアノや楽器の音色・速さ・強弱の違いを身体で表現する活動を実施した。ホールを中心に、「海」「森」などのイメージを取り入れた空間構成の中で、子どもが自由に表現できる環境を整えた。

リトミック講師による専門的な関わりと、担任による言語や造形への展開を組み合わせることで、音楽活動を表現あそびへと発展させた。

〈テーマ設定の理由〉

音楽を受動的に楽しむだけでなく、「どんな音?」「どう動くと合うかな?」といった子どもの気づきや問いをもとに活動を展開することで、主体的に表現する力を育てることを目的とした。

また、音やリズムを身体で感じる経験を通して、自分なりの表現を見つける楽しさや、友だちと関わりながら表現する力を育てることをねらいとした。

2. 活動スケジュール

対象クラス：年長組、年中組、年少組

期間：一年間を通じて（4月～3月）

3. 探究活動の実践：園だよりやドキュメンテーション、公開保育で保護者と活動の様子を共有した。

〈活動内容〉

ピアノや楽器の音の違いを聴き取り、「速い音だから走ってみよう」「ゆっくりだから揺れてみよう」など、音と動きを結びつけながら身体表現を行った。

また、「海みたいな音」「森みたいな感じ」といった子どものイメージをもとに空間を見立て、場面に応じた表現を楽しんだ。即興的な動きを取り入れることで、自分なりの表現を試す姿が見られた。

活動の中で生まれた気づきは言葉や造形へとつなげ、「どんな動きだった?」「何に見えた?」といった振り返りを通して、表現の広がりを促した。

〈環境構成〉

ホールを中心に、子どもが自由に動ける空間を確保し、音やイメージに応じて場を柔軟に見立てながら活動を行った。楽器に触れる機会も設け、音を自ら生み出す経験につなげた。

〈活動を通して見られた子どもたちの姿〉

年長児では、友だちの動きを見ながら「同じようにやってみよう」「少し変えてみよう」と工夫する姿や、「次はこんな動きにしたい」と自ら考える様子が見られた。

年少児では、手拍子やジャンプなど、音に合わせた動きが自然と遊びの中に取り入れられ、「トントン、パツ」といったリズムを楽しむ姿が見られた。

また、自由遊びの中でも、音楽に合わせて動物になりきるなど、音と動きを結びつけた表現が広がっていた。また、音を絵の具で表現する活動も行った。

4. 成果と振り返り

本活動を通して、子どもたちは音を感じ、それを自分なりに表現する楽しさを味わう姿が見られた。特に、問いや気づきをもとに活動を展開することで、受け身ではなく主体的に関わる様子が増えていった。

また、音楽をきっかけに言葉や造形へと表現が広がり、複数の手段で自分のイメージを表そうとする姿が見られた。友だちの表現に触れる中で、新たな発想を取り入れる様子もあり、活動が相互に影響し合う姿が見られた。

今後も、子どもの問いや気づきを大切にしながら、音と身体を通した表現活動を続けていく。

活動実施報告書

表現あそび

2025年度



4. 振り返り<ふりかえりによって得た先生の気づき>

表現あそびを通して、子どもたちが音に対して受動的に動くのではなく、「どんな音?」「どう動いたら合うかな」といった問いを持ちながら関わる姿が見られた。音の高低やリズムの変化に応じて、自分なりに動きを変えたり、友だちの表現に影響を受けながら動きを広げたりする様子が見られ、主体的に表現する力の育ちを感じた。

また、「正しく動くこと」よりも「音を感じて表現すること」に価値を置くことで、子どもたちが安心して試し、自分なりの表現を見つける姿が増えていった。即興的に動きを考えたり、「海みたい」「風みたい」とイメージをもとに表現したりする場面では、一人ひとりの個性がよく表れていた。

活動を重ねる中で、音楽への親しみが日常にも広がり、自由遊びの中でも音やリズムに合わせて体を動かす姿が見られるようになった。また、音で感じたことを言葉や造形で表そうとする姿も見られ、表現が一つの活動にとどまらず、他の活動へとつながっていく様子が確認できた。

本活動を通して、音楽は「教えるもの」ではなく、子どもが感じ、考え、表現するためのきっかけとなるものであると再認識した。今後も子どもの問いや気づきを起点に活動を展開し、安心して表現できる環境を整えていくことが重要であると感じた。



活動実施報告書



身近な自然のふしぎ

2025年度

1. テーマ設定理由

本園では、子どもたちが日常の中で感じる「なんでだろう？」という疑問を大切に、その気づきを出発点とした探究活動に取り組んでいる。野菜や植物、水や氷などの身近な素材を活用し、観察や実験、栽培活動を通して自然への興味や関心を育むことを目的とした。また、観察だけでなく制作や表現活動へとつなげることで、自ら考え、試しながら学びを深める力を育てることをねらいとした。

2. 活動スケジュール

- 対象：年少組・年中組・年長組
- 期間：4月～3月（通年）

3 活動内容

：園日よりドキュメンテーションで保護者と活動の様子を共有した。

① 色や変化に関する探究（紫キャベツ・色水）

紫キャベツや色水を使い、色の変化を観察した。実験や和紙染めを通して、変化への気づきや興味を深めた。

② 水や氷の変化に関する探究

氷や水に実際に触れながら変化を観察した。「溶ける」「なくなる」といった発見を通して、自然現象への関心を高めた。

③ 植物や自然物に関する探究

花や野菜を観察し、色や形、においなど五感を使って自然に触れた。色水づくりやスタンプ遊びを通して、観察と表現を結び付けた。

④ 自然現象の仕組みに関する探究（波）

「海の波はどうしてできるのか」という疑問をもとに実験を行い、結果を比較しながら自然現象の仕組みについて考えた。

⑤ 栽培活動を通じた自然とのつながり

野菜の栽培や収穫、調理、実食を通して、自然の恵みや食とのつながりについて学んだ。

●活動のために準備した素材や道具、環境設定

本活動では、芝生苗、野菜苗、花苗、栽培用品を活用し、園庭や畑で継続的な観察活動や栽培活動を行った。制作活動で作成した観察記録や作品を保管し、活動の振り返りや比較ができるよう乾燥棚を活用した。子どもたちが自然の変化や生長の過程を継続的に観察し、学びを深められる環境づくりに努めた。

活動実施報告書

身近な自然のふしぎ

2025年度



⑤ 栽培活動を通じた自然とのつながり

● さつまいも（全学年）

○活動内容：収穫、調理（さつまいも汁）

○準備した素材・道具：鍋、包丁、まな板

○環境設定：収穫したさつまいもや使用する野菜を事前に提示し、調理への見通しを持てるようにした

○活動中の子どもたちの様子：

土の中を掘りながら「大きなおいもあるかな？」と期待を持って取り組む姿が見られた。収穫したさつまいもを手に取り、「おひげみいたいのがついている」と形や特徴に気づく様子があった。

調理では、年長児が包丁を使い、年中・年少児が野菜をちぎるなど役割を分担しながら活動を行った。自分たちで作ったさつまいも汁を味わい、「おいしい」と感じる経験を通して、食への関心が高まる様子が見られた。苦手な野菜にも挑戦する姿が見られた。

● ジャガイモ（年長）

○活動内容：種イモ植え、観察、収穫、試食

○準備した素材・道具：種イモ、ボウル、灰

○環境設定：植えやすい土づくりや畝の整備を行い、継続的に観察できる環境を整えた

○活動中の子どもたちの様子：

種イモの断面に灰をつける場面では、「どうしてつけるのか」と疑問を持ち、自分なりに理由を考える姿が見られた。

収穫時には、「おじさんみいたいな形」「こんな形もある」と個々の違いに気づき、形の多様さを楽しむ様子が見られた。

● トマト・キュウリ（年長）

○活動内容：苗植え、観察、水やり、収穫、試食

○準備した素材・道具：苗、支柱、スコップ、水やり道具

○環境設定：支柱を立て、生長の様子が分かりやすいように環境を整えた

○活動中の子どもたちの様子：

日々の観察の中で、「赤くなってきた」「大きくなってきた」と変化に気づく姿が見られた。

収穫した野菜に対して「そのまま食べてみたい」と興味を持ち、実際に味わうことで、育てたものと食べることがつながる経験となった。

● トウモロコシ（年長）

○活動内容：種まき、観察、収穫、試食

○準備した素材・道具：種、スコップ、水やり道具

○環境設定：事前に畑の環境を整え、生長の過程を継続的に観察できるようにした

○活動中の子どもたちの様子：

「背が高くなってきた」と生長を楽しみにする姿が見られた。収穫時には皮をむきながら「ふわふわのひげがある」と細かな特徴に気づく様子があった。

収穫したてのトウモロコシを味わい、「あまい」と感じることで、自然の恵みを実感する姿が見られた。

○畑活動中の子どもたちの様子：

生長の様子を観察する中で、「葉っぱの形が違う」「色が少しずつ変わってきた」などの気づきが見られた。観察した野菜や植物をもとに、絵の具を使って描く活動も取り入れ、色や形を意識しながら表現する姿が見られた。

「ここは緑にしよう」「大きくなったところを描きたい」など、自分なりに感じたことを絵で表そうとする様子があり、観察と表現がつながる姿が見られた。

活動実施報告書



身近な自然のふしぎ

2025年度

4. 振り返り<ふりかえりによって得た先生の気づき>

① 色や変化に関する探究（紫キャベツ・色水）

色の変化が明確に見える活動を通して、子どもたちが自然に「どうして？」と疑問を持つ姿が見られた。繰り返し試す中で、自分なりに確かめようとする様子があり、実験的に関わる姿勢の育ちを感じた。また、色水を制作に活用することで、体験が表現へとつながり、理解が深まっていく様子が見られた。

② 水や氷の変化に関する探究

水や氷に実際に触れる体験を通して、「溶ける」「なくなる」といった変化に気づき、それを言葉にする姿が見られた。五感を使った関わりが、自然現象への理解の入り口となっていると感じた。また、変化を繰り返し試そうとする姿から、主体的に関わる力が育っていることがうかがえた。

③ 植物や自然物に関する探究

花や野菜に触れながら、色・形・においの違いに気づき、五感を使った観察が自然に行われていた。さらに、観察したものを絵の具で表現する活動を通して、「見たこと」を「自分なりに表す」姿が見られ、観察と表現がつながることで気づきが深まることを実感した。

④ 自然現象の仕組みに関する探究（波）

「波はどうしてできるのか」という問いに対して、自分なりに予想し、実際に試して確かめる姿が見られた。結果を比較しながら考える中で、現象を理解しようとする過程が生まれており、探究的な学びの深まりを感じた。

⑤ 栽培活動を通じた自然理解

栽培から収穫、調理、実食までを一連で経験することで、子どもたちの中に「育てる」「食べる」というつながりが生まれていた。日々の観察を通して変化に気づき、疑問を持ちながら関わる姿が見られた。

また、観察した野菜を絵の具で描く活動を通して、色や形の特徴を意識しながら表現する姿が見られ、気づきがより具体的な理解へとつながっていた。制作物を乾燥棚で保管することで、時間の経過による変化を比較する機会が生まれ、学びの積み重ねが可視化された。

さらに、自分たちで育てたものを味わうことで食への関心が高まり、苦手な野菜にも挑戦する姿が見られた。

全体総括

これらの活動を通して、子どもたちは身近な自然に対して興味や関心を持ち、自ら問いを立て、試しながら理解を深めていく姿が見られた。

また、絵の具による表現活動の中で乾燥棚の活用により、体験を一時的なものにとどめず、振り返りや比較を通して学びを継続できる環境が整ったことは大きな成果であった。今後も、観察・実験・表現を一体的に取り入れながら、探究活動を発展させていきたい。



活動実施報告書

身近な自然のふしぎ



2025年度

活動の様子

